

# 個別の指導計画の作成・改善を通じた教科指導の授業改善

－「個別の指導計画モデル」の活用と「授業者の意思決定」を踏まえた取組み－

○山田康朝<sup>1</sup> 阿久津百子<sup>2</sup> 竹内博紀<sup>3</sup> 高橋佳菜子<sup>4</sup> 引場陽子<sup>5</sup> 渡辺政治<sup>6</sup> 丸山真幸<sup>7</sup> 小山瑞貴<sup>8</sup> 橋本陸<sup>9</sup> 迫田拳<sup>10</sup> 笠原浩代<sup>11</sup>  
吉田光伸<sup>12</sup> 北川貴章<sup>13</sup> 安藤隆男<sup>14</sup>

（1 千葉県立四街道特別支援学校）（2 茨城県立水戸特別支援学校）（3 茨城県立下妻特別支援学校）（4 9 筑波大学附属桐が丘特別支援学校）（5 新潟県妙高市立新井中央小学校）（6 さいたま市立さくら草特別支援学校）（7 筑波大学附属久里浜特別支援学校）（8 神奈川県立えびな支援学校）（10 株式会社テクノスジャパン）（11 千葉県立楨の実特別支援学校）（12 東京都立光明学園）（13 国立特別支援教育総合研究所）（14 筑波大学）

KEY WORDS: 個別の指導計画の作成・改善 教科指導 授業改善

## I. 問題の所在と目的

特別な教育的ニーズのある子どもの教育を行う場合、特別支援学校学習指導要領（2017）では、自立活動の指導と各教科の指導は密接な関連を保つよう規定されている。しかしながら、どのように関連づけるか具体的な手順や方法までは示されていない。この状況において、有井ら（2020）は、自立活動の指導の本質的理解に導く学習機能を埋め込んだ個別の指導計画の作成と活用に関する「個別の指導計画モデル（安藤ら，2020）」を活用した実践研究を行った。そこでは、「1 事例による試行的なものであるため、今後様々な学校種での実践」等の検証が必要であるとした。このことから、自立活動と各教科の指導の密接な関連に資する実践研究の蓄積が求められる。さらに、安藤ら（2020）は、想定される課題として、「負担感に影響を及ぼす個人的および社会的要因の検討」の必要性を挙げている。これらの背景は、安藤（2001）が指摘した「社会的手抜き」や「同調圧力」等が要因と考えられる。この背景要因の対処を踏まえた個別の指導計画の作成と改善の取組みが期待される。本研究は、教科指導の授業改善について、「個別の指導計画モデル」の活用と、「社会的手抜き」や「同調圧力」の対処を踏まえた取組みを実施し、その成果と課題等を明らかにする。

## II. 方法

### 1. 対象

以下の 4 名（学校種・経験年数・役割）。そのうち、A は授業者、C はファシリテーターを担った。

A：特別支援学校教諭・13 年・学級担任、自立活動係

B：特別支援学校教諭・2 年・副担任、自立活動係

C：特別支援学校教諭・25 年・副主事

D：小学校教諭・27 年・通級指導担当、特別支援 Co.

### 2. 手続き

202X 年に行われた肢体不自由特別支援学校準ずる教育課程の英語科の 1 単元において、単元開始前・単元開始直後に個別の指導計画を作成し、単元中盤・単元終盤に改善を図った。作成・改善の方法は、「個別の指導計画モデル（安藤ら，2020）」を用いた。また、「社会的手抜き」や「同調圧力」の対処として、作成や改善の手続き上、集団による意思決定の場において、授業者の意思を尊重（授業者の意思決定）するようにした。なお、今回は、コロナ禍のため、オンラインによる実施とした。

### 3. 調査内容及び分析方法

アンケート・インタビュー調査を実施した。アンケート調査は、個別の指導計画の作成等に関する自由記述を求めた。インタビュー調査は、単元の終了後に、成果・課題・改善点を聴き取りした。分析は、インタビュー調査の語りを扱い、質的データ分析法（佐藤，2008）の手法を用いた。語りは、「逐語録」－『オープンコード』－【焦点コード（概念）】の順に、語りの意味内容から概念を抽出した。【概念】と代

表的な『オープンコード』を結果として示し、考察した。なお、今回は、改善点のみ取り上げる。

### 4. 倫理的配慮

対象授業関係者及び調査対象者に調査目的や内容等を説明し、同意を得た上で実施した。

## III. 結果と考察

改善点に関する語りの分析の結果、35 の「逐語録」、32 の『オープンコード』、6 の【概念】が抽出された。

【手続き上の思考方略】では、8 のオープンコード（以下、改善点とする）が示された。『各自で情報を整理する時間を設ける』は、作成・改善の討議時に個人での思考場面をあえて設定するとした。

【時間の効率化】では、7 の改善点が示された。『あくまで仮説－修正を重ねていくものと捉える』は、個別の指導計画は改善を重ねていく捉えが重要であり、そのことが、時間の効率化を見込めると考えられた。

【役割の分担】では、5 の改善点が示された。『討議中にまとまりかけてきた話は授業者（担任）に意思決定する機会を意識的に促すことが必要』は、授業者が指導計画と授業場面のつながりを持ち、指導イメージをつかめる討議のあり方に配慮するとした。これらの改善点は、ファシリテーターの役割を明確にするものと考えられる。

【事前の下準備】では、5 の改善点が示された。『自分で情報を整理し実態把握図を作成する経験を積むことができる手続きを設定する』は、事前に個人で一連の手続きを体験するとした。事前に、知識として共有し、演習を通して体感することが考えられた。

【オンラインによる作成の手がかり】では、5 の改善点が示された。『限られた情報を扱う際は手立てを講じる意識が必要になる』は、生徒の様子を捉えやすい映像撮りが必要であるとした。

【方法論の周知】では、2 の改善点が示された。『今回の方法は、理論を知らない教師に広めていくことが大事』は、研究方法の再考の必要性に言及した。

これらのことから、自立活動の指導内容に至る過程を加味した、自立活動の観点から必要な配慮・手立てのつながりのあり方について、今後検討を重ねる必要がある。

### （主要文献）

安藤隆男ら（2020）小中学校等における特別支援教育の質保証に向けた個別の指導計画のあり方 II. 2019 年度障害科学学会大会研究発表要旨集，24.

佐藤郁哉（2008）質的データ分析法．新曜社．

※本研究は、「つくば自立活動研究会」の活動の一環である「個別の指導計画研究グループ」の活動として実施した。

（Yasutomo YAMADA, Momoko AKUTSU, Hiroki TAKEUCHI, Kanako TAKAHASHI, Yoko HIKIBA, Masaharu WATANABE, Masayuki MARUYAMA, Mizuki KOYAMA, Riku HASHIMOTO, Ken SAKODA, Hiroyo KASAHARA, Mitunobu YOSIDA, Takaaki KITAGAWA, Takao ANDO）